

文学部長
氏名 中井 真之

2025 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り 文学部長コメント

1. 文学部の調査結果に関するコメント

文学部の各学科、各教員が授業アンケート結果の振り返りに取り組んでいることを確認できた。

文学部全体の授業評価の平均値はほとんどの設問で大学全体の平均値とほぼ同じか、これを上回っており、Q4 と Q10 のみで 0.1 ポイント低かった。

Q4（アクティブ・ラーニングの機会があった）については複数の学科で評価が低かったことを取り上げ、授業の組み立ての工夫の必要を指摘している一方、基礎的な知識や方法を学ぶ講義科目もあり科目の特性に応じて Q4 に関する評価結果を受け止める必要があるという指摘もあった。「学生同士で議論を行ったり、プレゼンテーションをしたりする等のアクティブラーニングの機会があった」という Q4 の設問をすべての科目の授業評価に用いるのではなく、カリキュラム全体における科目の位置づけ・特性に応じて、Q4 をその科目の評価に入れるかどうかを判断してもよいように思う。

Q10（シラバスで示されたこの授業の到達目標が身についた）については、大学全体の平均値より 0.1~0.2 ポイント低い評価結果の学科があったが、複数の学科でシラバスの書き方やシラバスとの整合性が課題として認識されていた。

AI の使用を問題として指摘する学科が複数あった。自分の頭で考えることのおもしろみを受講者に伝えることの重要性や AI 利用を含めた思考プロセスを可視化する課題や試験の設計の必要を指摘する学科もあった。どの学科にも共通する課題であると考えられるので、学部単位での検討が必要であろう。

Q12の授業外学習の時間の確保やそこでの課題の出し方を問題として指摘する学科もいくつかあった。2027 年度カリキュラムからこの点での単位の実質化が求められるので、FD 行事等を通して検討する必要があるであろう。

アンケート回収率が低いことを課題として指摘する学科も複数あった。この問題については、アンケートへの回答を授業時間内に実施することが一番の対応策となるであろう。学部としても各学科に授業時間内にアンケート実施するように働きかけていきたい。

2025 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り FD 委員会文学部選出委員コメント

1. 文学部の調査結果に関するコメント

各学科における授業アンケート結果の振り返りからは、次の二つの課題についての言及が目立ったように感じられた。一つは、アクティブ・ラーニングの機会について、もう一つは AI 使用についてである。

アクティブ・ラーニングの機会を問う Q4 の数値が低めであるという点については、前年度からの継続課題として認識されているようである。少人数の演習形式の授業と違い、多人数の講義形式の授業ではアクティブ・ラーニングの機会は限られるが、これらについても各授業の特性にあった形での方法が模索されている。

AI 使用については、AI の普及によって、読解力や自ら考える力を養えない、または養う意欲を失ってしまう学生が出てきているのではないかという懸念が示された。AI とどのように付き合っていくのか、授業で使用を認めるならばどのような方法が学生の能力を伸ばすのに効果的なのかを見定めるには、もう少し教員側の経験値も必要であると思われる。

所属学科 哲
氏名 鈴木 伸国

2025 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り 学科長コメント

1. 学科の調査結果に関するコメント

「結果を受けてのコメント」では、各教員から、授業への取り組みや知的関心について学生の側の多様性を指摘するコメントが挙げられている(「学生がそれぞれの関心に基づいて」)。コロナ以後、知的関心、能力、授業への取り組み態度も多様になっており、授業運営上の新たな工夫を要する場面もあろうかと思われた。「対策」としてシラバスでの事前告知、初回授業などでの、十分な説明などが挙げられていた。

学生のニーズとして(授業の)「分かりやすさ」、(単位取得の)「容易さ」が重視されているように見受けられる回答があった。これもシラバス、初回授業などで、到達目標―課題設定―授業のメソッドなどについて周知することが有効と思われる。学科内で共有することとしたい。

クラスの時間管理上の問題についてのコメントもあったが「対策」において、十分な改良のための対処が示されているのが確認できた。

「コメント」「対策」とも「特筆してのコメントはない」あるいは空欄(無回答)となっている回答が複数見られた。ハラスメントが問題化されやすい時代環境の変化のなかで、教員の授業管理が不十分であると思われる。アンケートコメントの記入を教員間で周知したい。

所属学科 史学科
氏名 中川 亜希

2025 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り 学科長コメント

1. 学科の調査結果に関するコメント

本学科の各担当教員が授業改善に真摯に取り組んでいる様子が認められた。一方で課題も明らかとなった。

まず少人数科目も含めた全科目一律のアンケート実施方法および集計方法に関する効率化の推進について、教員から問題として指摘されており、見直しを検討していただきたい。また学生の主体的学修や授業外学修時間については、学生を取り巻く環境、とりわけ就職活動の早期化等の影響が及んでいることが指摘されている。個々の教員が対応できる問題ではなく、できることは限定的である。

授業改善の工夫が評価の向上として現れている事例や、学生の学修が授業の狙いに沿って進んでいることが確認された事例、教員の教育姿勢が学生に十分伝わっている事例も報告されており、本学科の教育実践の成果として評価できる。

設問別平均値を見ると、多くの項目において概ね4点台であり、授業の満足度や教員の意欲、知的な刺激等については評価されている一方で、アクティブ・ラーニングの機会については低い傾向が見られ、この点は教員の振り返りにおいても認識されている。そしてシラバスとの整合性や授業運営の説明の在り方についても課題が確認された。

以上については各教員が真摯に対応しているが、学科でも共有し、引き続き可能な点は改善方法を検討していきたい。

所属学科 国文学科

氏名 山本 章博

2025 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り 学科長コメント

1. 学科の調査結果に関するコメント

学科全体としては、概ね良好な数値であると判断できる。質問 4（プレゼンテーションやアクティブ・ラーニングの機会）については、やや低い数値となっているが、文献読解を主眼とする学科の特性からすれば、むしろ健闘しているのではないかと考える。2 年生以上には、演習科目を卒業時まで 8 科目も課しており、研究発表の機会が多く設定されている。また、講義科目においても、2 年生以上の特講では、リアクションペーパーや課題を通じて、問いかける授業を各教員が工夫して行っている。演習にしても、特講にしても、共同で読むという空間が十分に作られているように思う。1 年生の基礎科目は、読解の基礎知識や方法を学ぶ場であるから、むやみにプレゼンテーションの場を設けないというのも、一つの見識であろう。以上のように、国文学科の授業は、基礎的講義科目、発展的講義科目、演習科目と大別できるが、それぞれの授業の特性に合わせて、概ね適切に運営されている。

なお、直接アンケートに関連することではないが、学生の演習発表の質や意欲について、その格差が広がっているとの教員の意見があった。確かにそれは、今年度に入ってから如実に感じるところがあり、AI の普及により、自ら考えることを根本的に放棄している学生が増えているのではないかと懸念される。AI の利用をいくら制限したとしても、究極的にはそれを確かめようもないのだから、自分の頭で思考を組み立てて考えることのおもしろさを体感させることが、授業においては、いよいよ重要になってくるのではないだろうか。

また、授業の内容に関わることはないが、国文学科では、演習の発表時に、かなりの分量の発表資料を紙媒体で配付することが多くある。これは、緻密な文献読解を重視する学科の特性によるものであるが、印刷代（ポイント）の付与の拡大を望む学生の声があったので特記しておく。

所属学科 英文学科

氏名 山口和彦

2025 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り 学科長コメント

1. 学科の調査結果に関するコメント

全体として、授業外学修を含む体系的なタスク設計、提出物への丁寧なフィードバック、他の学生の研究プロジェクトの共有などを取り入れた授業が高く評価されている点は、従来と変わらない傾向である。これらはいずれも広い意味でのアクティブラーニングに位置づけられるものであり、今後の英文学科の授業においても、講義中心の科目のみでは限界が見えつつあると言える。

一方で、アクティブラーニングの前提となる学生の予習時間の確保や自主的学習に対して懸念を示す声もあり、早急な対応策が求められる。自主的学習を含む授業の満足度がクラス・サイズと密接に関係していることは従来から指摘されている通りであるが、少人数制を可能な限り実践していく（大学に働きかけていく）と同時に、授業時間内でのさらなる工夫も必要となる。たとえば、「25分×4セット」のモジュール型構成（00～25分：レクチャーによる基礎知識のインプット、25～50分：ペアワーク、50～75分：レクチャー再開、75～100分：個人ワーク〔リアクションペーパー〕）のように、「インプット」と「アウトプット」を交互に配置する授業設計は有効な手立ての一つと考えられる。

今回の振り返りで特に顕著であったのは、AI使用に関する指摘である。AIや機械翻訳によって概要把握が容易になった結果、自ら文章を読み、批判的に考えることを行わない、あるいはその意義を見出せない学生が出てきているという報告があった。また、学生のプレゼンテーションを中心とするセミナー科目においても、課題作成をAIに依存し、自身の能力を磨く機会を逃しているという指摘が多い。むしろ、生成AIを自身の能力強化のためにどのように適切に活用させるかについては、教員自身も模索している段階であり、AIツールを使用せずに自分の言葉で書く作業を重視すると同時に、AI利用を含めた思考プロセスを可視化できる課題や試験の設計が必要であるという意見が多く見られた。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 小松原由理

2026 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り 学科長コメント

1. 学科の調査結果に関するコメント

ドイツ文学科の授業アンケートの総合的な結果に関しては、全体として授業の分かりやすさや教員の意欲、満足度といった基本的側面は概ね高評価であり、教育の基盤は安定していると評価できる。一方で、アンケート回収率の低さ、アクティブラーニングの機会の不足、授業外学習や主体的学びの促進といった点が、引き続き共通の継続課題として抽出された。これらに対しては、授業内でのアンケート実施の徹底、フィードバック時間の確保、教材や課題設計の見直し、授業内外を連動させた学習機会の充実などを通じて、各授業で具体的に改善を図る必要がある。

各教員の振り返りの姿勢について、やや気になる点がある。高い評価についてはもちろん今後の授業運営についての更なるモチベーションとしても大いに参照すべきだが、一方で、低評価に対しては、組織の構造的制約や、そもそも学生側の理解不足にあっさりと帰してしまうという傾向が見られる。授業アンケートを、教員の成果や承認のツールにしてしまうと、振り返りの資料として、良い意見も悪い意見も合理的に分析し、次に生かすという姿勢になかなか結びつかないように思われる。

教員の個別の授業に対する、あるいは学生に対する向き合い方の問題として、学科として、批判的・否定的な意見の中にこそ授業改善の契機が含まれるという認識を共有することが重要だと考える。今後もアンケートを授業改善のために積極的に利用し、教育実践の質的向上に結びつける姿勢を教員間で共有できればと願う。

所属学科 フランス文学科

氏名 福田 耕介

2025 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り 学科長コメント

1. 学科の調査結果に関するコメント

それぞれの教員がコメントに対して真摯に向き合い、対応していることがうかがわれた。
今後も継続していきたい。

所属学科 新聞学科

氏名 阿部 るり

2025 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り 学科長コメント

学科の調査結果に関するコメント

本学期の授業アンケート結果を学科全体として概観すると、おおむね学部平均を上回っており、各教員の自己評価からも、能動的な学びを引き出すための工夫がうかがえる。一方で、いくつかの共通した課題も認められる。少人数の演習科目では満足度が高く評価のバランスも良好であるのに対し、多人数の講義科目では一方向的な授業になりやすく、アクティブラーニングの機会が限られることから満足度が相対的に低下する傾向がみられる。また、アンケート回収率の向上も課題である。

総じて、学科として教育の質は一定水準を保っている。今後は、多人数科目における能動的学習の促進、学生の学修動機の喚起や授業への関与、生成 AI への対応等について、個々の工夫に委ねるだけでなく、組織的かつ継続的に検討していくことが望まれる。

文学部横断型プログラム

氏名 中井 真之

2025 年度秋学期授業アンケート結果の振り返り 文学部長コメント

1. アンケートの調査結果に関するコメント

文学部横断型人文学プログラムの開講科目の授業アンケート結果であるが、ほとんどの科目が Q4 以外は全体平均値と比較してもそれに劣らない、あるいはそれ以上の高い評価を得ていることが分かった。アンケートの対象となった科目には、「文化交渉入門」「映像芸術の世界」といった受講者数の比較的多い科目から、「プロジェクトゼミ」のような受講者数の少ない科目も含まれている。少人数の科目での授業の評価が高くなるのは理解できるが、大人数の科目においても高い評価を得ていることは注目すべきであろう。Q4 の評価が一部の科目で低くなっているが、それは科目の性格から来るものかもしれない。回答者数の少なすぎる科目もあったため、それらの科目においては授業時間内にアンケートに回答させるなどの措置を取る必要があるであろう。

所属学科 文学部・哲学科

氏名 教員①

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

授業アンケートの結果から、学生が授業内容に一定の関心をもって取り組んでいたことを確認できた。授業で扱った主題や議論に対して、学生がそれぞれの関心に基づいて理解を深めようとしていた点は、今後の授業運営においても大切にしたいと考えている。哲学の授業では、抽象的な問題や概念的な議論を扱うことが多い。得に、キリスト教人間学など、他学部・他学科の学生が多く履修する科目においては、哲学的な問いの立て方や議論の進め方に、最初から十分な親和性があるとは限らない。そのため、授業内容の意義や問題設定を、より具体的な例や身近な文脈に即して示す必要があると感じた。また、演習科目については、授業の充実度が受講生の主体的な参加に左右されやすい面がある。もっとも、それは演習科目の難しさであると同時に、受講生の主体性を育てる重要な機会でもある。今後は、受講生が自ら問いを立て、発言し、議論に参加しやすくなるよう、授業運営上の工夫をさらに意識する必要があると考えている。

2. 今後の具体的対応策など

今後は、講義科目において、各回の授業冒頭でその回の主題、到達目標、議論の見通しをより明確に示すよう努めたい。抽象的な概念や議論を扱う場合には、具体例や現代的な事例を補いながら説明し、学生が問題の所在を理解しやすくなるよう工夫したいと考えている。特に、他学部・他学科の学生が多く履修する科目では、哲学の専門的前提を当然視せず、問題の背景、議論の意義、基本的な用語の使い方を段階的に示すことを心がけたい。それにより、哲学を専門としない学生にとっても、授業内容に入りやすく、また自分自身の関心と結びつけて考えやすい授業にしていきたい。演習科目については、受講生の主体的な参加を促すため、発表や討論の前提となる論点整理、問いの立て方、コメントの仕方について、より明確な指針を与えるようにしたい。また、少人数での意見交換や事前課題なども活用し、発言しやすい環境を整えることで、受講生が自分の考えを形成し、それを授業内で共有できるよう支援していきたいと考えている。

所属学科 哲学科

氏名 教員②

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

講義形式の授業資料については、概ね肯定的な意見が見られた。他方で、講読形式の授業については、外国語の文法上の解釈にとどまることが多く、哲学的内容面での読解が不足していたと思われる。

また、リアクションペーパーを記入する時間が短くなってしまっていること、2 限の授業がお昼休みにかかってしまったことなど、時間管理面での問題も見受けられる。

2. 今後の具体的対応策など

講読形式の授業については、文法をみる時間と、内容上のディスカッションをする時間を可能な限り明確に区切り、外国語の学習にとどまらない哲学的対話の場を作るように心がける。

また授業内容を良い意味で取捨選択し、学生がリアクションペーパーを書く時間、また、お昼休みの課外活動の時間の確保に努める。

所属学科 哲学科

氏名 教員③

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

大体予想された反応で、例年と比べても、さほど変わらない。

2. 今後の具体的対応策など

妥当と思われる指摘に関しては、次年度以降、改善を図る。

所属学科 哲学科

氏名 教員④

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

1. ラテン語 I B、形而上学 II は、本学ならではの外国語科目、哲学科選択必修科目である。指導には十分な配慮をはらっているが、「フィードバック」が行いにくい科目であることは改めて意識した。さりとて、教授内容の多さからすると、この点は犠牲にすべき点であるとも感じる。
2. 双方の科目とも、授業外学習に費やした時間の数値が低くなっていることは、授業での印象と乖離しており、戸惑っている（特に、外国語科目であるラテン語 IB での問題正答率は高かったので、予復習は行われていた、と考える）。
3. ラテン語 IB では指定されたテキストをこなすことで、また形而上学では「あえて指定教材を使わない」（佐藤の moodle 音源のみ）ことで、「授業外学習」の（友人との意見交換、参考図書の精読）が当てはまらない授業であったことが、数値の低さに影響を与えているものと、推察している。

2. 今後の具体的対応策など

- ・外国語科目といえども「古典語」であるラテン語 IB、内省を極度に必要とする形而上学 II とも、その性格上、「フィードバック」「アクティブ・ラーニング」には評価項目としてなじまない。学生には、OSD やオリエンテーションで、この点の「低さ」を覚悟した上での履修登録を促したい。
- ・また、担当教員としては、最終的には Q13 の「総合的満足度」が高くなるよう、授業の工夫をしていきたい。

所属学科 _____ 哲学科 _____
氏名 _____ 教員⑤ _____

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

特筆してのコメントはない。

2. 今後の具体的対応策など

所属学科 哲学科

氏名 教員⑥

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

講義科目については、全般に改善の傾向が幾つものポイントにおいて見出された（但し、当該教員単独の 2 科目での査定に対して、主担当で他に数名の輪講科目とでは、受講学生たちからの反応とコメントの内容に相当な相違も見いだせる）。二年次生の選択必修語学科目および三年次／四年次生の選択必修の文献講読科目では、いまだ留意してよりよく受講学生たちへの授業効果を高める点が存する可能性について振り返ってみる。哲学の専門科目に「説明のわかりやすさ」を規準項目として設定すること自体は極めて疑問である。授業学生たちの理解度を十分に考慮してテキストを選択することは常に教員の課題であり続けるが、学科の専門科目を通してどのように哲学的に思惟する力が身につき覚醒が促されるのかが〈学科における学び〉の核心であることに変わりはない。実社会でどのように役立つのかといった単に実用的な観点からの知の在り方は、文学部全体のもっと広大で長距離的な学問的成果を目ざす根本体制と相容れるものではないと確信する。

2. 今後の具体的対応策など

学生たちが自ら思考し哲学的問題脈絡に浸潤してゆけるように、授業科目のプログラムをさらに練り直す事から初めて、文献講読などではテキストの選定により細心に注意深く取り組むようにする。アクティヴ・ラーニングはできるだけすべての授業科目に取り入れ、何らかの形で授業を構成する要素とできればよい。

所属学科	哲学科
氏名	教員⑦

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

一つの科目で他学部からの受講学生から「何を言っているのか分からなかった」とのコメントがあった。シラバスの「哲学科開講の古代哲学史、中世哲学史、近代哲学史を履修済みであること。」との注記を授業内で確認する必要があると感じた。

一つの科目で「トイレ、体調不良」の学生への配慮がたりないとの指摘があった。クラスが始まって、無言ですぐに出てゆき、授業終わりに帰って来ることがしばしばある学生であったが、それであろうか。また一人の学生が出てゆくと、それにつづく学生が続くようなケースも見られた。クラス内での雰囲気調整の意味もあり、まったく不問に付すのはなかなか難しいケースのように思われる。これも上と同じく、学期始めなどに、一般事例として事前に説明することとしたい。

2. 今後の具体的対応策など

上のとおり。

所属学科	史学科
氏名	教員①

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

「特講」で成績評価をレポートからテストに切り替えたという、受講生からの指摘があった。たしかにシラバスの記述どおりではなかったが、授業初回のガイダンスで訂正し、その後も数回にわたって授業で成績評価の方針を伝えたので、大きな支障はなかったと思う。

2. 今後の具体的対応策など

とくにありません。

所属学科 文学部史学科

氏名 教員②

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

1. FD アンケート全体について

授業中または Moodle を通じてアンケートへの参加を再三うながしたが、特にゼミなどの少人数受講者の科目で回答率が低かった。FD アンケートの性質上しかたがないとはいえ、全科目で同一の形式でおこなう必要性について、FD 委員会で再考されたい。

2. 担当科目の回答の印象

概ね予想通りの内容で、好意的な評価が多かった。しかし、教員側からすると、学生の主体性は乏しく、不満が残った。個人的には FD アンケートの形式や内容がマンネリ化しており、しかもそれが学生・教員の双方にとって有効に機能していないと思われる。厳しいことをあえて書くと、FD アンケートはそれを作成・実施・分析する者以外には、意味が薄れているのではないだろうか（しかも、そのために学生・教員は多大を労力強いられている……）。

2. 今後の具体的対応策など

基本的な前提として、ある授業に対する問題は必ずしも、その授業ないしは授業担当者の責任と一元的に考えることはできないということがある。つまり、企業のインターンシップなど昨今の就職活動の前倒しにより、学生の時間の取り合いが生じており、その条件化で授業をどう運営すべきかについて教員は頭を悩ませているといえる。この流れはいかんともし難く、成績評価を厳しくするくらいが教員に許されるオプションだと思われる

あと、この文章もどうせ誰にも読まれないので書いておくが、令和のご時世に Word ファイルを事務が集めて集計するというのは、あまりに時代遅れだ。DX 化をもっとも進めてもらいたい。

以上。

所属学科 _____ 史学科 _____
氏名 _____ 教員③ _____

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

- ① 演習は受講者数が少ないため、有効な結果になっているのか疑問に思った。
- ② コーディネータを務める授業では、異なる分野の話を聞けることをポジティブに捉える学生の声が聞けて良かった。
- ③ 特講は、進め方をかなり試行錯誤したところ、2 年前に同科目を担当したときよりも各平均値が上昇していて良かった。

2. 今後の具体的対応策など

- ① 履修者 15 名以下の演習科目では、アンケートをしてもあまり有効な結果が得られないことから、アンケートの対象から外せるなら外す。
- ② コーディネータを務める授業では、授業アンケートの実施を非常勤講師の先生に一任し、リマインドし忘れたためか、回答率が 3 割を切ってしまった。授業アンケートの実施は、非常勤の先生にお願いするのではなく、コーディネータが直接出向いておこなうことも考えたい。

所属学科	史学科
氏名	教員④

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

回答者が少ないため学生全体の状況を反映しているとは言えないが、演習に関しては、授業外学習の時間も含め、こちらの狙い通りに学習を進めてくれていることが分かった。

2. 今後の具体的対応策など

オンデマンドの講義について、授業外学習時間やアクティブ・ラーニングの機会について工夫していきたい。

所属学科 文学部史学科

氏名 教員⑤

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

このところ、個別の授業アンケートについては、申し訳ないことながら、学生へ回答するよう積極的には呼びかけていない。結果として回答率が低く、偏った形になってしまいが、その分、教員にクレームを付けたい学生の回答が多くなっているのかもしれない。演習の回答は1名だが、「教員の説明が分かりにくい」「シラバスどおりではない」という批判のあることが分かった。前者は懇切丁寧に説明するしかないが、後者は4年生からの卒論完成報告などを省いた点だろうか。ゼミの運営の変更については、受講生全員と話しあって決定しているが、一部に不満があるのだろう。もっと状況を確認するようにしたい。特講の回答率は1/3くらいだが、1名だけがほとんどの項目で最低点を付けている。テーマがジェンダーで「尖った」内容であったため、内容的に批判者が多くなるのは仕方がないかと考えていたが、リアクション・ペーパーからの印象とはずいぶん異なる結果だった。こちらも、より丁寧な説明を心がける必要はあろう。

2. 今後の具体的対応策など

デリケートな問題に触れる内容は、誤解や心理的抵抗も大きく生じるため、批判者を置いてけぼりにすることのないよう、より丁寧な対応を心がけたい。演習では、学生との信頼関係にあぐらをかくのではなく、やはり自己批判しつつ進めてゆきたい。

講義内でのアクティヴ・ラーニング、意見交換の際の方式は、2024年度はグループ分けをして話しあいをさせていたのだが、席やグループ、ファシリテーターなどを指定すると、内容についての意見交換ではなく、「短時間で意見を出す方法を学ぶ」結果になってしまいうことが多く、取りやめた経緯がある。学生が求める（慣れ親しんだ）授業の形式も変わってきており、そこには従うべき部分と批判すべき部分があるが、今後どうすべきかはあらためて考えたい。

所属学科 史学科
氏名 教員⑥

2025 年度秋学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

こちらの熱意が伝わっているようで、その点は、率直にうれしい。
ただ、改善すべき点もあり、引き続き教材や授業方法の改善につとめたいと思う。

2. 今後の具体的対応策など

講義科目におけるアクティブラーニングが不足しているようなので、講義科目の授業の一部を双方向型にできないか、検討したい。

所属学科 国文学科

氏名 教員①

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

いよいよ学生間の格差が開いているように感じる。つまり、本気で研究を学ぼうとしている学生と、まるで学問に関心がない学生との格差である。学問に関心がない学生にも関心を抱かせるように、分かりやすく、魅力的なトピックスを盛り込むようにしているが、それも限界を感じる。

2. 今後の具体的対応策など

1 年生の基礎科目については、引き続き、できるだけ興味を引くような授業を心がけたいが、300 番題、400 番題の授業においては、本気で研究をしたい学生に振り切った授業にすること、いたづらにレベルを下げないことが、結果的に関心のない学生を振り向かせる可能性が高いのかもしれないと最近感じている。多少の脱落者があっても、アンケートの数値が下がったとしても、である。よく分からないけれど、何か奥深い世界があるのかもしれない、という感覚と言ってよいだろうか、学問の深さを感じさせたい。それは何か知識や技能を身につけることとは異なる次元のことである。授業アンケートの結果は、果てしない授業（教育）というものへの問いに関して、いろいろと考えるきっかけになると思うが、その数値が高いからと言って、何が偉いという訳でもない。何者かが決めた評価の枠組みに、単に適っているかどうかの指標でしかない。それ以上でも以下でもあるまい。そもそも人が人を育てることなどできない。これは親となってみて分かったことだが、そういう認識の上で、何ができるのか、ということを考えないと、教育はすべて暴力になってしまう。病んでしまう学生がいかに多いことか。その支援策の整備を、などという前に、傲慢な大人の認識を改めなければならないと思う。

所属学科 国文学科
氏名 教員②

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

アンケートに怯える私の姿を知る学生たちが付度してくれたのか、総じていい結果だった。特に「そもそも福井先生の話聴きに來ているので毎度このアンケートを書きながらそういうことじゃないんだよなあ、と思ってます。〔略〕上記のアンケートの項目に当てはまらない良さがあるので私は好きです」というコメントが印象的だった。

また気をよくして全学共通科目のアンケートにもじっくり目を通して見たところ、「上智大学の中で、だれよりも面白い先生です。宝です。絶対に他の大学に行ってほしくない〔略〕いつかこの先生がいるから早慶ではなく上智に來た、と言う学生がたくさん現れると確信しています。なお、回しものではないのであしからず、念のため」というすごいコメントがあって驚いた。しかしそこまでの授業はしていない。

2. 今後の具体的対応策など

上に引いたコメントの書き手のように、強く支持してくれる学生がいるということは裏返せば、私の発言や物の見方、講義内容に違和感や不快感を抱いた受講生もきつというところだろう（むしろそちらの方が多いのではないか）。そしてただ彼（女）らの優しさが、それを表面化させなかっただけなのだろう。ということで結局はやはり、アンケートを見た結果、暗澹たる気持ちに襲われ、今後の具体的対応策に心苦しむことになった。これからしばらくは調子外れの授業を、ピエロのように展開する日々が続くような気がする。

またこれは私にはどうすることもできない点だが、「教室が毎回暑かった。構内の変なところを改修する前に冷暖房の最低限の整備が必要だと思う」や、これは春学期の授業へのコメントだが「国文学科の演習の発表時に大量の資料を印刷する必要があり〔略〕今の印刷ポイントでは足りなくなることがある。〔略〕充実した学びのためにも検討をしてほしい。せめて両面印刷も 1 ポイント換算に戻してほしい」など、環境面に関する要望がいくつも寄せられていたことを、付記しておきたい。

所属学科 国文学科
氏名 教員③

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

おおむね良好な評価を得たものと理解する。
数値が低い設問は、授業の特性・目的の上から、しかあるべきものなので、特段顧慮する必要を認めない。

2. 今後の具体的対応策など

引き続き適切な授業運営に努めて参りたい。

所属学科 国文学科
氏名 教員④

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

概ねうまく授業ができているように感じられた。授業の意図するところも学生に伝わっているようであった。

2. 今後の具体的対応策など

今後も、これまで同様、しっかりと授業に取り組みたい。

所属学科 国文学科

氏名 教員⑤

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

満足度の値はだいたい学部科目平均値の値と同じだった。なるべく満足度が高くなるように努力したいと思う。

2. 今後の具体的対応策など

今後、よりわかりやすい板書とよりわかりやすい説明を心掛けたい。そして好奇心を高めるような授業をしていきたい。

所属学科	国文学科
氏名	教員⑥

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

全体的には、学部平均とほぼ同レベルの数値であったが、前回と同様に、質問 4（プレゼンテーションやアクティブ・ラーニングの機会）の評価は低めに出た。

ただし、講読では、学部科目同水準の値となっているので、授業のタイプによる相違と考える。学部の必修科目の場合は、知識を伝達する必要があるので、どうしても双方向の活動が抑制される。

授業内容については、リアクションペーパーへのフィードバックが一定の評価を得ているようなので、今後も続けたい。

なお、国語史概説では、日本語そのものの歴史と合わせて、研究史もとあげた。その点について興味をもってくれた学生がいるようで、ありがたい。

2. 今後の具体的対応策など

リアクションペーパーに関するフィードバックは、今後も続ける。

また、講義科目においても、意識的に問いかけを行い、双方向性を少しでも保てるよう、配慮したい。

所属学科 国文学科

氏名 教員⑦

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

Q3. Q4の教員と学生との対話、学生
どうしのディスカッション等が行えないことか
いても結果に出ているが、文献読解を
主に行う講義の性質上、これは止むを得
ない事と思う

2. 今後の具体的対応策など

上記をカバーする為、^{学生による}作品の朗読(漢
文の訓読)を行う事を考えている(学生に
は嫌がられると思うが)。

所属学科	英文学科
氏名	教員①

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

「一見難しく見える内容でも講義中に身近な例や説明があることで理解できた」という意見を多く受けたため、学生の日常と教室内の講義内容を有機的に繋げることが学生の学習意欲を高める上で大いに効果的であることを改めて実感した。

2. 今後の具体的対応策など

引き続き相互方向の授業を意識し、学生の知的好奇心を刺激し続ける授業を意識していきたい。

所属学科 英文学科
氏名 教員②

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

当該学期の授業アンケート結果としては、全体的に学部科目平均と同等かそれ以上の評価を受けた項目が多く、それほど低い評価項目がなかったため、概ね良好な結果であった。年度によって受講者との相性も異なるため一概には言えないが、今回は大人数の講義の授業がなかったので受講者と比較的意思疎通しやすい環境にあり、グループディスカッションも多く実施できたことが満足度に繋がったと考える。

ここ数年では、教員が専門とする 19 世紀文学作品、特にアメリカン・ルネサンスの作品を扱う際に、文章や英語自体の難解さから受講者の理解度・満足度が落ちる傾向があることを課題としていた。このため、ゴシック作品を扱う 2 年生の必修授業 **Critical Reading** においては、19 世紀の作品に加えて現代のものも取り入れることでバランスを取り、ディスカッションのグループ構成等も工夫した結果、今回アンケートを実施したクラスの中では最も高い評価が得られた。

2. 今後の具体的対応策など

グループディスカッションの機会を多めに設けた場合、特に予習の量が多い授業ではディスカッションに参加しない学生がでてくるようで、同じグループになった学生から不満のコメントが出されていた。今後の授業では改めてグループ構成を検討し、学生間の交流を促進するなどの対応を図りたい。

また、ここ数年のアンケートの傾向として、評価項目「**Q5** 学修した内容が在学中もしくは卒業後にどのように応用されるか学ぶ機会があった」、「**Q6** 知識を相互に結びつけることにより、多様なものの見方や考え方が身につく授業だった」が平均を若干下回る傾向があったため、当該学期は扱う文学テキストや作家の解説にとどまらず、できるだけその背景や現代社会との関連についても言及するように努めた結果、今回は平均程度までは改善が見られた。引き続き、多様な観点や考えへと受講者を導くよう取り組みたい。

所属学科 英文学科
氏名 教員③

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

少人数科目については、比較的好意的な評価だったのですが、大人数の科目の評価はやや劣るので、改善に努めたい。

2. 今後の具体的対応策など

大人数の科目では、退屈にさせないため、時折ディスカッションを加える工夫をしたいと考えています。

所属学科 英文学科

氏名 教員④

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

演習科目についてはどの項目もほぼ満点に近い評価となっている。学生のコメントを読むと、授業外学修を含めた体系的タスク、提出物へのフィードバック、他の学生の研究プロジェクトの共有など、授業の設計と実践について狙い通りの指導効果になっていることが分かる。講義科目についても全体的な評価は学科平均とほぼ同じか上回っており、特に実生活での応用については高評価となっているが、アクティブラーニングの機会がもっとあった方がよいとの指摘があり、学期を終えての自己省察と一致する。

2. 今後の具体的対応策など

演習科目では、引き続き一人一人に対する丁寧なフィードバックを心がけたい。講義科目については、扱う内容を少し減らし、授業内のディスカッションやタスクを増やして、よりインターラクティブでアクティブな学びを実現したい。また、2027 年度からの単位の実質化に向けての準備として、毎回の授業外学修を確実に課して、より深い学びとなるよう指導したい。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑤

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

全 5 科目において、学生からの真摯なフィードバックをいただいたことに感謝する。Discussion & Presentation 2 (Q13: 4.8) および CLIL-Based Seminar 2 (Q13: 4.5) は学部平均を上回る満足度を示しており、プレゼンテーションを中心とした能動的な学習形式が一定の成果を上げたと評価できる。学生からのコメントだと、「プレゼンを頻繁にすることにより、リサーチ能力が上がり、人前で発表することへの抵抗感が減ったように感じる」、「先生が課題に点数とコメントをつけてくださるのがモチベーションになった」、「他の授業とは異なった観点から授業内容で興味深かった」、「アクティブラーニングの機会が多く能動的に授業に参加することができた」などがある。

一方、Writing Workshop 2 (Q13: 3.5) および Special Topics in American Studies 2 (Q13: 3.7) は学部平均 (4.5) を大きく下回っており、特にシラバスとの乖離・課題の難易度設定・授業運営の透明性について改善の余地があると認識している。また、Q12 (授業外学習時間) の平均が全科目で低い傾向にあり、学習の深化を促す工夫が必要と感じた。

2. 今後の具体的対応策など

American Studies におけるシラバスと授業内容の乖離という課題において、学期初回にシラバス変更の理由を明示し、学生の合意を得るプロセスを設けるべきである。また、批判的思考を要する発展的課題を増やし、段階的レベルアップを設計する。

出席確認の方法や評価基準、オンデマンド回の扱いやスケジュールについて、学期初回に明確に説明する。また、学生間の不公平感を生じさせない運営を心がける。

授業外学習時間の少なさについて、今後リーディング課題や事前準備の意義を明確に伝え、学習ログやジャーナリングなどの課題の提出を促す。

「学んだ内容が将来どう活きるか」(Q5) への評価が複数科目でやや低い傾向にあった。各授業活動が大学卒業後のキャリアや社会生活にどう結びつくかを、授業の中で積極的に言語化して伝えるよう努める。

所属学科	英文学科
氏名	教員⑥

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

①講義科目であっても、学生同士のディスカッションや意見交換の時間を確保することの重要性をご指摘いただいた。また、②学生の発言が明らかにネットからの引用であったり、自らの考えに基づかない場合にも、適切に対応していたとのコメントをいただいた。①②いずれについても肯定的なご意見をいただき、ありがたく感じている。

2. 今後の具体的対応策など

中規模程度のクラスにおけるディスカッションや意見交換については、そのまとめやコメントも含めて対応可能であるが、大規模クラスでは対応が難しい。この点を重視するのであれば、Zoom による授業とし、ブレイクアウトルームを活用する方法も考えられるが、対面授業のメリットが損なわれる側面も大きい。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑦

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

コメントでは説明の分かりやすさを挙げてくれている学生がいますが、他の項目と比べると多少評価が低めに出ています。これが原因かわかりませんが、配布資料の情報量が少なすぎるというコメントがあります。スライドのことを指しているものと思われます。スライドに情報を盛り込む日本式のパワーポイントの資料スタイルになれている学生にとっては、キーワードや図画を使い、講義を聞く上での指標とするようなスタイルは情報量が少ないと捉えられるものと思われます。また、文学史と思想史を絡めているため知識としてはかなりの量をカバーし、考えさせるようにしているので、追い切れないというところがあるのかもしれませんが。

約 90 名の学生のリアクションに全て毎週コメントをしています、学生にとってはよかったようです。

2. 今後の具体的対応策など

教員としては本年度が最後となりますが、秋学期の授業で指摘された点については工夫を加えたいと思います。授業外の自主学習で内容の一部をカバーするようにすることも一案と考えています。

所属学科	英文学科
氏名	教員⑧

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

- 1・丁寧に英語文献を読み進める講読の授業については、AI や機械翻訳によって概要をつかむことが容易になった時代において、そもそもなぜ「自分で読む」必要があるのかについて、疑問を抱く学生が出てきているように感じられる。
- 2・ショート動画が注意力の散漫を招きがちな現下の文化状況のもとで、100 分はおろか、60 分ほどのまとまったレクチャーを聞き続けることにも困難が伴うケースがあることが感じられる。
- 3・学生のプレゼンテーションを主体とするセミナー科目において、学生が「楽をする」ためではなく、自身の能力を強化する目的で生成 AI を使用する適切なやり方について、教員自身も試行錯誤の最中である。

2. 今後の具体的対応策など

- 1・「概要を掴むのは AI を使って各自 10 分でやってくること」を前提とし（反転学習）、授業内ではその文献の内容を踏まえたディスカッションや、日本の事例への応用など、高次元のアウトプットに時間を使うなどの工夫を検討する。
- 2・「25 分×4 セット」のモジュール型構成などを検討する。たとえば、
00～25 分： レクチャー（核となる知識のインプット）
25～50 分： ペアワーク
50～75 分： レクチャー再開
75～100 分： 個人ワーク（リアクションペーパー）……
等々、「インプット」と「アウトプット」を交互に配置する。
- 3・プレゼン資料やレジュメの提出時に、「AI にどんなプロンプトを投げ、どんな回答が出たか」「それに対して自分はどう違和感を持ち、どう修正したか」のプロセス（履歴）を書かせ、これを評価対象に含める（「思考のプロセス」を可視化する）、「自分のプレゼンの論理的弱点を AI に 5 つ指摘させ、それに対する反論を準備してくること」といった課題を出すなどの方法を検討する。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑨

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

全体として、学生から概ね肯定的かつ前向きな評価を得られたことを嬉しく思います。授業の難易度や課題の量についても、概ね適切なバランスが維持されていることが確認できました。(Overall, I am pleased to see generally positive and constructive feedback from the students. The results confirm that the level of difficulty and course workload maintained an appropriate balance.)

2. 今後の具体的対応策など

現在のシラバスおよび授業構成の枠組みをベースに維持しつつ、学生の理解度や自律的な学習（自律学習）をさらに促すため、日々のフィードバックの質をより高めていく所存です。(While maintaining the current syllabus framework and course structure, I plan to further enhance the quality of ongoing feedback to better support student comprehension and autonomous learning.)

所属学科	英文学科
氏名	教員⑩

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

全体的に予習にかける時間が圧倒的に少なく、早急に対策を講じる必要がある。本来、予習を十分におこなったうえで臨むべき授業であるのだが、それをおこなわずともやりすごせる授業になってしまっていることについて反省し、効果的な策を講じたい。翻訳ツールなどを学生が使用する可能性は大であるので、旧来の予習とは異なる形での予習内容を編み出す必要性を痛感している。

授業の満足度については、クラス・サイズと少なからぬ関係にあると思われる。専門の演習クラスだけではなく、1,2 年次の基礎クラスについても少人数制を徹底させることが必要であると考えます。

2. 今後の具体的対応策など

予習の強化に関しては

- ・授業内での小テストの回数を増やす
- ・参考図書や資料を予習の一環として組み込めるように工夫する（グループごとに異なる参考資料を配布し、内容に関するプレゼンテーションをおこなわせるなど）

A I 関連への対処としては

- ・授業内で特定のテーマを与え、それについての意見や分析を、AI ツールを使用せずに自分の言葉で書かせるという作業を意識的に盛り込むようにする
- ・ただしこの場合、授業外での予習を必要とするようなテーマを考案すべきである

所属学科 英文学科

氏名 教員⑪

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

It was nice to find that my classes are reasonably well received.

2. 今後の具体的対応策など

Nothing really.

所属学科 ドイツ文学科
氏名 教員①

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

授業をするにあたっての基本的な部分に対して（説明の分かりやすさ、意欲、刺激を届けること）は概ね「5」あるいは「4」の評価に入っており、その点は大きな問題はないと判断している。受け手目線で授業を組み立てることを今後も意識して、よりよい授業の実現に向けてさらに努力をしていきたい。

2. 今後の具体的対応策など

まずは、アンケートの回収率をあげたい。また、具体的な問題点はやはり、特定の項目「Q4 アクティブラーニングの機会があったか」や、「Q5 卒業後への応用」「Q12 授業時間外に費やす時間」への評価をどのように上げていくかという点で、なかでも私自身の課題は概論のような授業でいかに上記の点を含め入れるかということにある。アクティブラーニングのために、毎回キーワードを提示してその部分を調べておくように指示しているが、そのフィードバックの時間が授業内で十分に取れていないため、今後はその点も授業に含め入れるように検討したい。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員②

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

学生はおおむね授業に満足してくれているようでほっとした。特に Q1「この授業における教員の説明はわかりやすかった」、Q2「この授業に対する教員の意欲を感じた」、Q13「この授業の満足度を教えてください」の項目は、文献演習を筆頭に軒並み高く、教員の努力が報われたようでうれしく思っている。しかし、ドイツ語 Ib の Q1 の値は 4.4 とその中でも比較的低かったため、ドイツ語文法の教科書を変更することを考えている。2025 年度にドイツ語 I で使用した教科書は、文法項目の解説が非常に詳しく、練習問題も独作文を中心としたものが豊富に収録されており、ドイツ語を専門に学ぶ学生の文法教科書としてはとても優れている。しかし、昨今はかつてと比べると学生のモチベーションや学力が多様化しており、また高校の英語の授業ではかつてのように文法をあまり教えなくなっている。来年度は現状に合わせ、もっと文法の解説をコンパクトにした教科書を使用するつもりである。

2. 今後の具体的対応策など

ドイツ語 I の授業では、2026 年度春学期からドイツ語文法の教科書を変更した。この教科書は文法項目がコンパクトにまとまっており、例文、文法説明、練習問題に用いる語彙が、本編では基本的に 100 語とされており、安心して語形変化の学習や構文理解に取り組むことが出来る。別冊の補足説明と練習問題は 100 語にこだわらず、単語の意味も付していないので、家で辞書を引きながらじっくり取り組むのに向いている。授業中は主に本編の解説と練習問題、家での宿題は別冊の練習問題という二段構えの学習により、受講生のドイツ語文法に対する理解は昨年度よりも高まっていると感じる。また、昨年度は文法説明と練習問題をこなすだけで精いっぱいだったが、今年度は時間的に余裕があるため、パートナー練習やドイツ語を使ったさまざまなゲーム、ドイツ語圏の都市や文化の紹介などを行う時間を増やすことが出来、学生はより楽しみながらドイツ語学習に取り組んでいるように見える。今後も学生の学習意欲を高めるようにさまざまな工夫を凝らしたいと考えている。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員③

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

「ドイツ語Ⅰb」「ドイツ語Ⅱb」のアンケート回答率は40パーセントを超えたが、「ドイツ文学研究基礎2」は31パーセント、「卒論ゼミ」である「文献演習7a」は4パーセントの回答率であった。やはり授業中にアンケート回答の時間を取って回答させる必要があるであろう。回答の結果を見ると、語学科目については、授業の性質上、Q7のような設問は学部科目別平均値と比較してもやや低い評価とならざるを得ないと感じた。その他の設問に関しては、学部科目別平均値と同じくらいの評価であった。「ドイツ文学研究基礎2」については、Q1の設問に関して、学部科目別平均値よりやや低い評価となった。先行研究の論文を参照して単に意見をまとめるだけでなく、自分なりの思考を展開してほしかったため、あえて先行研究を批判する視点を提示することを心掛けたが、そのことが教科書にしたがって考える習慣のついている一部の学生には理解に際しての困難を引き起こしたのかもしれない。

2. 今後の具体的対応策など

授業時間中にアンケート回答の時間を設け、回答率を上げるべく努力する。
語学の授業に関しては、引き続き、これまで通りの授業の進め方をし、履修する学生の状況に応じた対応を心掛けたい。「ドイツ文学研究基礎2」については、個々の設問に関わる授業運営上のパフォーマンスのさらなる向上に努め、Q1に関しては、自立的な思考を身につけることを目標としていることを周知の上、学生が理解しやすい資料の作成、言葉の使用を心掛けるとともに、学生の理解がどのあたりが不十分かを見極めるべく、学生のリアクションペーパーへの回答内容により一層注意を払い、理解が十分となるべく対応したい。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員④

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

秋学期のドイツ語 IIb, B クラス読本及び文献演習 1b に関しては、授業時間外の回答となってしまうため集計数が少なくなってしまった。授業最終回はテスト振り返りやレポート講評などやることが多く、アンケートの時間が取れなかった。時間外に答えて頂くよう連絡はしたが、回答者が少ないのは残念である。項目 2 (教員の意欲) , 5 (卒業後にどのように応用されるか) , 10 (到達目標が身についた) あたりが高評価なのは教員冥利に尽きる。

2. 今後の具体的対応策など

文献演習の自由記述で「改善が必要」の項目に「**deeper discussion and interpretation**」という記述が見られた。ドイツ人留学生のコメントと思われる。ドイツ語の読解力を身につける授業のため、作品内容に関する議論や解釈よりもドイツ語講読を重視するのは致し方ない。議論や解釈は「ドイツ文学研究」等の講義科目で行なっている。

また、履修者が 30 名を超えているのもディスカッションを困難にする要因となった。履修者数が特定教員に偏ることのないよう時間割など学科内で工夫する必要があると感じた。

作品解釈に関しては授業内ではなく授業外時間の課題として提出するなど、単なる語学の授業で終わらない工夫はしたつもりである。コメントシートなどの提出回数を増やすなどして、授業に積極的に関わっているという自覚を履修者に持ってもらえるよう心がけたい。

所属学科 フランス文学科
氏名 教員①

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

講義コマについて、進度がシラバスより遅れたとの指摘がありました。

2. 今後の具体的対応策など

担当初年度だったという事情があり、やや遅れ気味になりましたが、26 年度からはシラバス通りの進度で進められる予定です。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員②

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

- ・春学期よりも秋学期は回答者数が減ってしまった。
- ・フィードバックを増やしたことが、満足度に反映されるのが早いと感じた。
- ・一方、フィードバックが丁寧すぎて授業時間が押されるという意見もあり、調整がむずかしい。
- ・ある少人数のクラスで、「文章一つ一つについて、教員とクラスメートとで議論する時間があつたので、単語のニュアンスまで理解することができたし、主体的に参加できた」といわれ、教員だけでなく他のクラスメートを巻き込むのが効果的と感じた。

2. 今後の具体的対応策など

- ・アンケート回答の時間をじゅうぶん確保する。
- ・フィードバックと授業時間のバランスを調整する。
- ・疑問点の解明に学生を巻き込み、主体性を引き出すようにする。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員③

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

「わかりやすかった」という割合が低かった。

「うるさい人がある」という指摘があった。

2. 今後の具体的対応策など

より丁寧に説明をしていきたい。

「うるさい人」に関しては気づけなかったもので、今後注意していきたい。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員④

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

コメントをすべてよく読みました。学生たちからの興味深い意見には大変感銘を受けました。今後はそれらを参考にさせていただきます。

2. 今後の具体的対応策など

Moodle のページに、日本語での説明をもっと追加するようにします。

所属学科 フランス文学科
氏名 教員⑤

2025年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

The overall results are quite good, most of the students being quite pleased with the courses overall, even if the number of students who has answered to it may not be sufficient. The one way to have results which are most of the time, and for some years in a row, above the average result of the faculty lay into a very careful management of each student case.

For instance, in the classroom, the least efficient way of teaching would be to stay at the board, and letting the students at the rear of the classroom without guidance. This style of teaching is quite prevalent.

Fortunately, the University's policy till now, to have most of the time small-number classes enable one to manage very precisely.

2. 今後の具体的対応策など

In the future, I would like to enhance the discussion capacities and exercises. The problem is that the time taken to perform this task.

Another line would be to try to connect more the class with the outside life, although classes in French are quite autonomous, but one can integrate more topics dealing with contemporary issues

所属学科	新聞学科
氏名	教員①

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

いずれの科目もおおむね学部平均を超えていて、授業内容に関して特段の問題はないと思われる。

コロナ以降、リアクションペーパーを毎回 Moodle で回収し、次回授業の冒頭でそれなりに時間をとってフィードバックをしている。24 年度からは学生の希望もあって、授業用の資料を Moodle で PDF 配布していたが、今学期になってそれらを生成 AI に読み込ませてリアクションペーパーを作成してくる学生が生じた。

これによって、授業の評価方法を途中で変更せざるをえなくなり、一部の学生からは不満もみられたようである。授業をきちんときいているかどうかを図るため、従来、持ち込み可としていた試験もすべて不可にした。

2. 今後の具体的対応策など

26 年度のシラバスでは生成 AI の使用について明確に提示したうえで、授業内での手書きリアクションペーパー提出を復活させている。

これにより教務の負担が膨大であり、不公平感のない効率的な方法を考えたい。

所属学科	新聞学科
氏名	教員②

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

おおむね、予想通りの結果です。特に問題はないと思います。

2. 今後の具体的対応策など

引き続き、学生の満足度の高い授業にしたいと考えています。

所属学科	新聞学科
氏名	教員③

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

「演習」科目など、受講者が比較的少人数の科目に関しては、レーダーチャートのグラフが比較的バランスのよく、また、おおむね満足度の高い回答が大半だが、他方、「マスメディア論Ⅱ」など多人数の講義科目では、レーダーチャートのバランスが崩れるとともに、満足の平均が相対的に下がっている。「演習」科目の方が課題等が多いのに対し、多人数受講の科目に関しては自由記述を見ても、講義内容の難しさを記述する回答があった。多人数受講の科目におけるレポート、期末試験の結果を見ても、自らの意志で真面目に講義内容を復習し、自らの知識にしている受講者と、講義内容に対して主体的に学びに向きあっていない者との差が、このような結果に現れているように思われる。

2. 今後の具体的対応策など

2027 年度のカリキュラム改革で、当局より「深い学び」を掲げたカリキュラムへの移行が示されているが、これまでの多人数受講科目においても、自らの学びの時間を確保することで理解を深めるような課題を、定期的に課していきたい。

所属学科 新聞学科

氏名 教員④

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

- ・演習については概ね好評価だったようだ。今後も一人ひとり丁寧に対応していきたい。
- ・「人間行動とマスメディアⅡ」については、習得させる知識量が多いのでどうしてもパワーポイントや動画を用いた一方向の授業になってしまう。何らかの工夫改善の必要性は感じている。

2. 今後の具体的対応策など

- ・演習Ⅱ・演習Ⅲでは、各自が自由に設定したテーマを扱い「仮説構築→データ収集→仮説検証」という方法論で統一する方針をとってきた。授業時間内に可能な限り、共通するポイントについて全体に向けたアドバイスを行ってきた。しかし近年は、学生のテーマ設定がより多様になり、個別に検討すべき論点が増えてきている。こうした状況を踏まえ、今後は個別相談の時間を拡充し、オンライン対応も含めて柔軟にサポートできる体制を整えていきたい。
- ・「人間行動とマスメディアⅡ」については、今後ゲーム的な要素の導入を検討したい。
「人間の情報処理」の回でスキーマに関するクイズの評判が良かったので、毎回テーマに関連するクイズを出題して10～15分程度各回答時間を設け、テーマへの関与を深めさせたい。

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑤

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

授業アンケートの回答状況を見る限り、回答者は一部にとどまっており、学生全体の声を十分に反映しているとは言い難い状況にあると感じられる。また、学生の中には、大学の授業そのものに対する期待が必ずしも高くない層も一定数存在しているのではないかと推察される。このような状況がどのような要因によって形成されているのかについては、個別の授業改善にとどまらず、学修環境全体の観点から検討する必要があると考える。例えば、本学の学生はサークル活動やアルバイトに多くの時間を割いており、これらと授業との関係が、学修への関与の度合いに影響を与えている可能性も考えられる。こうした傾向が結果として一定の多数派を形成し、現在の学修観や学習態度を支える土壌となっている可能性についても留意すべきである。一方で、授業設計に多くの時間と労力を投じている教員の立場からは、こうした状況に難しさを感じる場面があるのも事実である。しかしながら、教育の質保証の観点からは、引き続き教員側の工夫や改善が求められている現状も踏まえる必要がある。そのうえで、少数であっても真摯に学修に取り組む学生が存在する限り、その学びを支えることは教育機関としての重要な責務である。今後は、学生の学修動機や授業への関与をどのように高めていくかについて、組織的・継続的に検討していくことが求められる。

2. 今後の具体的対応策など

- ・学生の学力や学修意欲の多様性を踏まえ、過度な前提を置かず、段階的に学習を促す授業設計を行う。あわせて、自立的な学びを一律に求めるのではなく、状況に応じた支援の在り方を検討する。
- ・授業内容については、要点や本質に焦点を当て、理解しやすい形で提示することを意識する。
- ・抽象的な概念の理解を促進するために、日常生活における具体的な事象と関連づけた説明を適宜取り入れる。
- ・授業運営に支障を及ぼす言動に対しては、過度に影響を受けることのないよう、冷静かつ安定的に対応する姿勢を保つ。

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑥

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

During the last couple of years, the motivation and curiosity among the students to know deeply and get themselves updated with the issues and current affairs have increased. Many students take active part in the class, think for themselves and express their views in the class.

Of course, the degree of students' eagerness and openness towards learning new things keeps changing every year, every semester. There are positive differences and occasionally pessimistic trends too. But students of last semester were in general good and generous.

Under the given circumstances, I was able to engage students – involving them in conversations and personal research, expressing their side of the story, sharing views, ideas, reflections among themselves, etc – at a depth level. Fortunately, and positively, many responded generously and liked the content/dynamics of the class.

2. 今後の具体的対応策など

- The world affairs undergo a drastic change since the time of confirming syllabus in February. Each semester has its own challenges and issues, I would like to make some basic changes in the structure, dynamics, and execution of the classes depending on the current situation and issues.
- Perhaps I need to listen to the voices of the students – to know if the assignments are too many or too frequent, the speed of the class, whether non-native speakers can follow up with the tempo of the class, etc. practically speaking, it is difficult to understand each student's current position – whether they follow in the class or just flow with the class.
- Prepare more material/articles that are engaging and give possibility for further deliberations and research.
- I need to commit myself to giving more constructive feedback on assignments, and class submissions.
- Be honest and fair in evaluating and grading.

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑦

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

秋学期はゲストスピーカーを招待した講義や、学生間の議論や発表を促す講義を行うなど工夫をしていたことが、評価に反映されたと思います。ただし、講義によっては授業外学習時間が少なかったり、大人数の講義では議論をする機会が若干限られていたり、工夫の余地が見られました。また、コメントでも指摘されていた通り、一部の授業については直前の講義や会議の関係で数分遅れることが頻発していたため、時間管理が課題です。講義によっては最終回の講義でアンケートの時間をしっかりと確保することができず、回答者数が少なくなってしまったことも課題です。

2. 今後の具体的対応策など

今後は、授業時間外の学習時間を確保するための課題設計、講義規模の大小に関わらず学生が議論し、意見を述べる場面の検討など、工夫します。また、時間通り開始できるように時間管理を注すること、アンケートの回答率が高まるよう授業内でしっかり時間を確保します。

所属学科 新聞学科
氏名 教員⑧

2025 年秋度学期実施 授業アンケートの振り返り

1. 結果を受けてのコメント

おおむね高い評価を得られたように思われる。

2. 今後の具体的対応策など

特定の学生の提出物を他の学生の前で批判的に講評する際には、できるだけ匿名性を確保するなど、当該特定学生の心情に配慮するよう一層努めたい。